



自著紹介

『斐伊川百科 —フィールドで学ぶ—』

(今井書店、2015年3月)

上 園 昌 武

(島根大学法文学部法経学科教授)

本書は、島根大学の講義「フィールドで学ぶ斐伊川百科」のテキストとして2015年春に刊行された。内容はタイトルに示されているとおり、鳥根県東部の斐伊川流域をフィールドにして、自然科学、歴史と文化、産業と暮らしに関する研究成果を一般読者・学生向けにわかりやすく解説したものである。

斐伊川流域の特徴は、宍道湖や中海という汽水域をもつ特異な自然環境、荒神谷遺跡や出雲大社などの歴史文化や出雲神話、たたら製鉄や築地松などの伝統的な産業や暮らしをもっていることであろう。斐伊川流域は、自然・社会・歴史・文化・人間という観点であらゆる学問分野に現地調査の場を提供する絶好のフィールドである。本講義は、文部科学省の採択事業「鳥根の人と自然に学ぶフィールド学習教育プログラムの構築—鳥根大学から世界が見え

る教育の展開」(2006~08年度)の成果として2009年より開講された。これまでの7年間で30人以上の講師が授業を担当し、そのなかの23名が本書を執筆した。

本書は、5つの章で構成されている。序章の「斐伊川—文化と産業を育んだ出雲大川—」では、斐伊川・宍道湖・中海や出雲平野の形成の歴史、汽水域に広がる社会問題や流域管理のあり方が説明されている。序章は、初回の講義で全受講生が聴講する内容である。その後、受講生は「歴史と文化」「自然科学」「産業と暮らし」の3分野のいずれかを選択してフィールド学習に向けて座学に取り組んでいく。第4章の「斐伊川流域を歩く」では、実際にフィールド学習で現地視察・体験したモデルコースが掲載されており、調査や散策の手引きの役割を担っている。第1~3章は、現場に出かける事前学

習の解説書と位置づけられている。

第1章の「斐伊川沿岸の歴史と文化」では、考古学・歴史学・地理学の専門家が学術研究による最新の知見を示すとともに、それを現地探訪で確認するための手引きを提供している。『出雲国風土記』に記述された古代出雲地域の実像が古代史学と考古学それぞれの成果に基づいて解き明かされ、たたら製鉄の歴史も考古学の発掘成果や斐伊川水運との関連で多面的に解説されている。また、愛宕山頂の「日清戦争従軍記念碑」は、義和団鎮圧出兵、日露戦争から満州事変に至る戦争でも利用された、全国的にも特異な史跡であること、出雲平野の景観美を醸し出す築地松は、強風を防ぐとともに、土塁を固めて洪水に備えるために設けられたものだという知見を提示している。

第2章の「自然と科学」では、宍道湖や中海の水質、生態系、地質などが取り上げられている。宍道湖と中海は汽水湖であり、それらを大橋川がつなぐ独特の環境と生態系を形成している。中海干拓事業は中止になったとはいえ、一部で堤防や埋め立てが行われたために水環境が変わり、また、産業・生活排水の流入や沿岸の開発で生態系が悪化してき

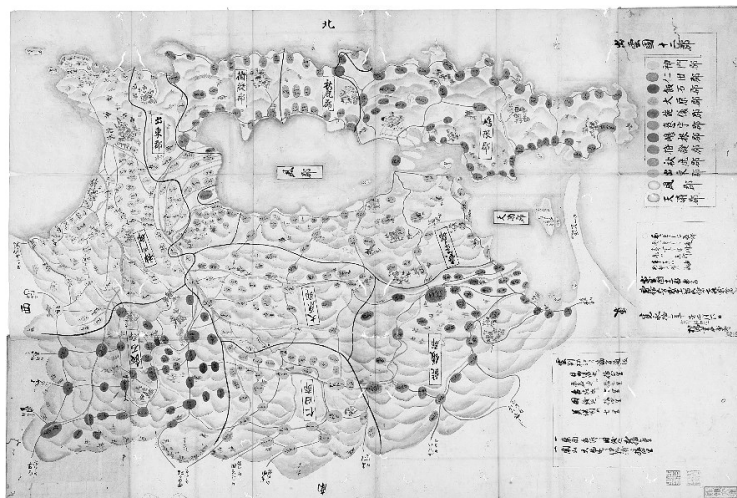
た。その影響で赤潮や貧酸素現象が度々起こっており、宍道湖七珍やサルボウガイなど汽水域の貴重な生態系や漁業資源の保全が喫緊の課題となっている。大根島を中海に浮かぶ「ミニハワイ」とみるのは興味深いだろう。

第3章の「産業とくらし」では、斐伊川流域の農林水産業と製造業の歴史や特質が解説されている。斐伊川上中流域の主要産業は一次産業であるが、燃料革命による木炭生産の減衰、国の農林業政策の後退とともに、過疎・高齢化が進展しているのは周知の通りである。そうした逆境の中で、椎茸、水稻、肉牛のそれぞれのブランド化をすすめ、地域内の貨幣循環だけでなく、域外からの貨幣流入も可能にする今という六次産業化のはしりに至ったことは興味深い。斐伊川下流域では、電気機械の加工組立製造業がみられるが、出雲平野の農業は水稻、麦、大豆など県内1位の生産量を誇る穀倉地帯でもある。また、ショウガ、サツマイモ、イチジクなど特産品も多く、今後の六次産業化の発展が期待されている。斐伊川流域の産業とくらしは、労働者の高齢化に向かい合いながら、六次産業化と若者の参加によって新たな展開をみせようとして

いる。

本書は初めて斐伊川流域の自然・歴史文化・産業経済に触れる人にも分かりやすく読めるよう編まれたものである。本書の編集作業を通じて、本学には実に多様な研究スタッフが揃っていることに驚かされた。全国の大学では、ご当地の「地域学」が

探究されているが、筆者は、島根大学においても本書で取り上げられなかった分野を含めた「斐伊川学」を展開できる素地が十分にあると考えているし、別の視点や領域で構成される「地域学」の創設に向けた挑戦が続くことを願いたい。



江戸時代に描かれた出雲国十二郡図（島根大学附属図書館蔵）